

## 準備委員会企画シンポジウム I

# 子ども理解のための発達研究と臨床 —心の基礎研究—

企画者	齋藤久美子 岡本夏木
司会者	岡本夏木(京都女子大学)
話題提供者	田島信元(東京外国語大学) 内田伸子(お茶の水女子大学) 片岡基明(近江八幡市心身障害児通園センター) 齋藤久美子(京都大学)
指定討論者	守屋慶子(立命館大学) 山口俊郎(兵庫教育大学)

## 〔企画の主旨〕

子どもの心のはたらきについてこれまでどのようなことを学んで来たか、発達研究と臨床の各専門領域で得てきている理解のあり方を互いに交換し合いたい。この種のテーマについて議論をいかに実質的に捻りあるものにできるか、それは必ずしも容易なことではないであろうが、今回はひとまず幼児期を中心に発達の早い時期に注目してみる。そして、心のはたらきとしては、「自己表現する」心、「かかわり合う」心を共通の関心事としながら、対人的「関係性」の形成と「個としての人格」の発達の問題をめぐって、議論を展開できればと思う。

発達のより早い時期をとり上げるのは、一つには近年この時期の知見が充実して来ていることにもよる。しかし、それは単に乳幼児に関心を限ったことではなく、心のはたらきそのものを基礎的に問い直し、心のはたらきのほんもとを学び直そうという課題意識を含んでいる。

一般的なアプローチのあり方としては、法則定立(あるいは一般化)―個性記述(あるいは個別化)、横断的―縦断的、リサーチ志向―臨床的対処志向、非関与観察―関与観察、実証的―経験的、などが双極的にとり上げられる。そして、ごく大まかには左側が発達研究に多いアプローチ、右側がむしろ臨床の方のアプローチ

とすることになるかもしれない。しかしそもそも発達の視点と臨床的視点とが別々のものなのかどうか自体が議論を要するところであるだけに、単純に割り切って二分してしまえる問題ではないであろう。

実際には臨床の場合、やむにやまれない状況に追い込まれ、さまざまに負の要素をはらんだ心のあり方を入り口として、変化していく個別的な心の過程に参加し、その中から心について学び進むというあり方をとる。そしてそこには、心の発達の变化とその障害についての微視的な発見が含まれる。

一方発達研究の場合は、一般に健常児を対象に、心の発達の標準的なあり方と、それを規定する一般的な要因を検討し実証的資料を多面的に提示しつつ、理論構成していこうとする立場であろう。

両者を予め異領域と見なしたり、あるいはまた逆にまず重なりや一致点を求めてかかるというふうにするのではなく、それよりはまず各演者が具体的に専門理解を提示し合いたいと思う。そしてその中で互いに活性化し合えるところ、相互に有用な観点、そしてまた異質な面などを、新たに見出し確認し合うことができるとすれば、今後の理解の展開に向けて有意義ではないかと考えるものである。